

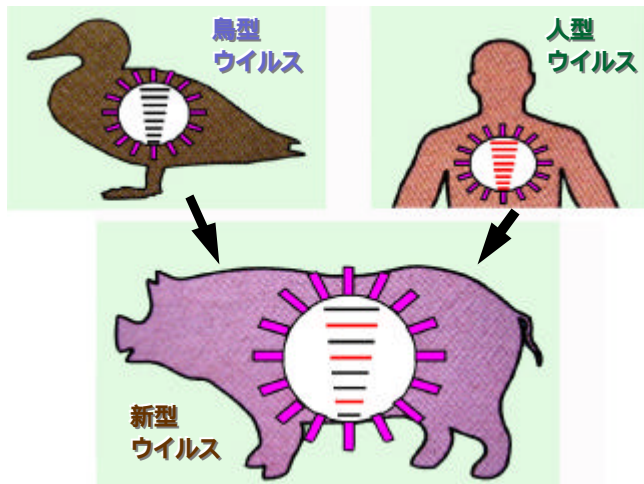
新型インフルエンザウイルスの監視体制

現在、わが国を含めた多くのアジア地域の国々で高病原性鳥インフルエンザウイルス(H5型)による鶏等での集団発生が報告されています。ベトナムやタイでは人への感染や死亡例も報告されています。現在のところこのウイルスによる人から人への感染は確認されておらず、新型ウイルスとは認められていませんが今後の動向には注意する必要があります。

人と鳥のインフルエンザウイルスが同時に1つの細胞に感染した場合、双方の遺伝子が交じり、異なる子孫ウイルスが出現します。これが新型インフルエンザ出現の重要なメカニズムの1つとされています。特に豚は、人型と鳥型インフルエンザの両方に感染するので、新型インフルエンザウイルスの出現の場所として重視されています。

現在、人の間で流行している型は、Aソ連型(H1型)、A香港型(H3型)、B型です。A型インフルエンザウイルスは、10~40年を周期に新しい亜型が出現して世界的な大流行を起しており、Aソ連型(H1型)とA香港型(H3型)の流行はすでに20~30年続いているので、そろそろ新型が出現してもおかしくないと考えられています。

当研究所では医療機関から送付される患者の検体からインフルエンザウイルスを検出し、その型に



新型インフルエンザウイルス出現のメカニズム

ついて調べています。また、わが国での豚及び鳥のインフルエンザについては、平成10年度より厚生労働省が調査を実施しており、当研究所も協力機関として、毎年100頭の豚について抗体調査及びウイルス分離を実施しています。しかし、これまで陽性例はありませんでした。今後さらにウイルスの監視体制を充実させていきたいと考えています。

(微生物室)

刺し網でヘビを捕獲

ハブを捕まえる手段としてマウスをおとりにしたハブ捕獲器が実用化されています。しかし、一台6千円と高価なこと、マウスの管理が必要な上、排泄物で不衛生になるなど、一般の人が長期間使うのは困難です。マウスのいらぬ低価格の捕獲器ができればハブ対策が簡単になると考えられます。今回、ハブ研究室では、魚網や防鳥ネット等にハブが絡まる事例をヒントに、刺し網でのハブ捕獲を試みました。

防鳥ネット60枚を石垣に被せるなどの方法で設置し、7か月間でハブ10匹、ヒメハブ3匹、アカマタ3匹、タイワンスジオ4匹の計23匹を捕獲し



刺し網にかかったハブ



捕獲されたヘビの種類

ました。5匹のヘビ(ハブ2、アカマタ3)が捕まった石垣もありました。

ハブは頭と胴体の太さが同じなので網にかかりにくいのですが、餌を食べた直後や、数回網をくぐった時にかかっています。他の3種(ヒメハブ、タイワンスジオ、アカマタ)は頭より胴体が太いので、餌を食べなくても網にかかります。

防鳥ネットは、1網(1m x 10m)千円以下と安く、必要な労力は網を張る時だけです。無害なヘビのアカマタが捕まる問題点があるものの、小型の無毒ヘビやトカゲ、鳥など他の動物はかかりません。ハブ駆除の他、沖縄本島中部で分布域を拡大している外来ヘビ、タイワンスジオの有効な駆除手段となることも期待できます。(ハブ研究室)